

『撰集抄』にみる仏教説話の教化性について

沼 波 政 保

はじめに

仏教説話を収録した集、つまり仏教説話集は、最初の『日本霊異記』以来多く作られてきたが、鎌倉期に入るとその全盛期を迎え、やがていわゆる鎌倉新仏教がその宗派性を強めるのに伴って急激に衰退に向かった。

ところで、仏教はその性格から衆庶に対してその教えを説き仏教に導くという行為（その行為を今、唱導と呼ぶことにする）が当然なされるわけであるが、仏教説話集はこの唱導のすがたを色濃く残している。それは、仏教説話自体が唱導の場で語られ、また語られることを予定したものであったからである。

例えば、『日本霊異記』^①はその書名『日本国現報善悪霊異記』が示すとおり、現世における因果応報のすがたを語るものであるが、

・因果の理めに信はざらむや（上巻第十一話）

『撰集抄』にみる仏教説話の教化性について

・ 嗚呼現報はなほだ近し。己れを怒りて仁ぶべし。慈悲無くあらざれ（同第十六話）
・ むしろ悪しき鬼託きて多く濫言すとも、経を持つ者を誹謗るべからず。能く口業を護るべし（同第十九話）
というように、説話の最後に教訓的なことばで教えを説く。

また、わが国最大の説話集である『今昔物語集』^①においても、仏法部の説話においては、

・ 此レヲ思フニ、世ノ人此レヲ聞テ、乞食也ト云フトモ法花経ヲ誦セム者ヲ、戯レテモ努々不輕咲ズシテ、可
礼敬シトナム語り伝ヘタルトヤ（卷十四第二十八話）

・ 此ヲ聞カム人、專ニ般若経ヲ可信敬シナム語り伝ヘタルトヤ（同第三十話）

・ 観音モ此クゾ利益シ給ケルトナム語り伝ヘタルトヤ（卷十六第二十七話）

と末尾において教えを説く。

このように、ほとんどの仏教説話集は、その話の末尾において二、三行を用いて教えを説いている。また本文の中においても衆庶に語りかけるもの言いの名残は散見され、唱導のすがたを垣間見ることができるのである。

一

『撰集抄』^②は、『発心集』や『閑居友』等と並んで、「説話の時代」（折口信夫）と称される鎌倉期初期を代表する仏教説話集である。

『撰集抄』冒頭話「増賀上人之事」は大筋次のような内容である。

昔、増賀上人という人がおられた。上人は幼時より道心が深く、叡山の根本中堂に千夜籠って確固たる道心を得られるように祈ったけれども眞の道心が得られなかつたので、ある時伊勢大神宮に詣でて祈請したところ、夢に「道心おこさむとおもはば、此身を身とな思ひそ」という示現を受けた。夢覚めて、それは名利を捨てよということだと悟った上人は、着ている物すべてを乞食たちに与えて赤裸で叡山へ戻った。道中、人々は気が狂ったかと思えども、上人は気にかけることもなく叡山に戻った。同僚たちは気が狂ったと見る人もあり、気の毒に思う人もいた。師匠の慈恵大師は、名利を捨てたことは分かるが、そこまでしなくてもよかろうと諫められたが、上人は永久に名利を捨てるにはこうするべきだと応えて、「あら樂しの身や。をうく」と言いながら走り去った。大師も門の外に出て涙ながらに見送りなされた。上人はその後、大和多武峯に庵を構えた。

この話を語ったのに続けて作者は

げにもうたてしきは名利の二なり。まさしく貪瞋癡の三毒より事おこりて、身をまことある物とおもひて、是をたすけんため、そこばくの偽をかまふるにや。武勇の家に生るゝ物は、胡録の矢をつがひ、三尺の劍をぬいて、一陣をかけて命をうしなふも名利勝他のため也。柳のまゆみほそくかき、蘭麝を衣にうつし、秋風のなごりを送るすがたもてあつかふも、名利の二にすぎず。又、墨染のたもとに身をやつし、念珠を手にくぐらするも、詮はたゞ、人に帰依せられて世をすぎむとのばかりごと、あるひは、極位極官をきはめて公家の梵筵につらなり、三千の禪徒にいつかれんと思へるも、名利の二をはなれず。此理をしらざる類は申におよばず、

唯識止観に眼をさらし、法文の至理をわきまへ侍るほどの人たちの、知りながらすて侍らで、生死の海にたゞよひ給ふぞかし。たれ々も、是をもてはなれんとし侍れど、世々をへて思ひなれにし事の、あらためがたさに侍り。しかるに、此増賀上人の、名利の思ひをやがてふりすて給ひけん、ありがたきには侍らずや。これ又、伊勢大神宮の御たすけにあらずは、いかにしてか此こゝろもつき侍るべきや。貪癡のむら雲ひきおほひ、名利の常闇なる身の、五十鈴川の波にすゝがれて、天照太神の御光にきえぬるにこそと、かへすゝかたじけなく貴く侍り。此事いづれの世にか忘れ奉るべき。

と語る。すなわち、この世のすべての人が名利のために偽りの日々を送り苦しんでおり、この道理を知らない人ももちろん、仏教を学んで名利にとらわれることの無益なことを承知している人も名利を離れることができない中で、この増賀上人が即座に名利を捨てられたことを賞賛し、伊勢大神宮の御助けのありがたさを語るのである。

この引用した部分は、前半のストーリー部分とほぼ同じ分量を割いて語られており、しかも作者の思いを語っている。このように作者自身の思いを語る部分が非常に多いのは、他の仏教説話集がそれに一、二行を充てるものが多い。このように作者自身の思いを語る部分が非常に多いのは、他の仏教説話集がそれに一、二行を充てるものが多い。ほとんどであるのに対して、『撰集抄』の特徴と言い得るものである。西尾光一氏はこれを「説話評論」と称されたが、その当否はともかくも、「そこばくの偽をかまふるにや」や「生死の海にたゞよひ給ふぞかし」、「ありがたきには侍らずや」、「いかにしてか此こゝろもつき侍るべきや」などの言葉遣いをはじめ、その内容も衆庶に語りかけるものになっており、唱導のすがたをうかがうことができる。

卷一第二話は、親からの土地を騙し取られた男が祇園神社の神の託宣によって仮の世に執着して苦しむことの愚

かさを悟り、妻子も捨てて出家した話である。やがて土地を騙し取った男もこのことを聞きつけて出家し、一所に念仏して修行に励んだ。かくて二年後、男は後に出家した男の膝に抱かれて眠るが如くに亡くなった。数限りない人が集まって、往生人として結縁し、またその男の姿を写し取ったということであった。

この話に続けて、作者は次のように語る。

此事をきくに、そごろに涙所せくまで侍り。かくのごとく、よしなき人にさまたげをなさるゝには、かなはぬまでも、よるひるひまをうかがひて、そごろに心をつくして、神佛に詣でも、あしかれとのみ祈りて、いど思ひに思をかさね、ますゝ歎きに歎きをそへて、此世むなく、来世いたづらになり果てぬるは、世中の人なるぞかし。しかれば、此聖の、神のみことのりをげにと深く思ひ入侍りて、かなしう覚えし女、いとほしかりし子をふり捨てて、世捨人のたぐひとなり給ひけん、すべてありがたきには侍らずや。われらごときの物の、いま示現を蒙りたらむには、「まづ申所をばかなへ給はで、あはれ道心の歌、なにとも覚えず」と神をそしり申とも、よも此世をばふり捨てじと、いとど口惜しく侍り。又、押しとりけん人の発心は、なほたけありて貴く侍り。さやうの敵なんどの出家遁世せんには、いとどうれしく、ますゝ財寶にこそかゝるべきに、あさましと思ひて、ひとつ庵にゆきて、後世のつとをたくはへ給ひけん事、筆にものがたく侍り。

印度もろこし我朝、つらくむかしの跡をとぶらふに、憂き事にあうて世を遁るゝたぐひは多く侍れども、いまだ聞かず、よろこびありて世を捨つるとは。されば往生の素懐をとげ給ふもことわり也。和光利物の恵み、かへすぐもかたじけなく侍り。「本體廬舎那、久遠成正覚、爲度衆生故、示現大明神」これなり。久遠正覚

の如來、雜類同塵したまふらん、ことにかたじけなく侍りけり。

やはり、前話と同じく、ストーリー部分の半分以上を費やして二人の発心出家を賞賛しているが、そのもの言いをはじめ衆庶に語りかけるものとなっており、唱導のすがたをとどめたものとなっている。

第三話は都の中を歩き回る僧の話である。この僧は、顔や手足は泥だらけで筵や薦のようなものを来て乞食をして世を渡っていた。見かねた人が着物を与えようとしても必要でない限りは受け取らず、食べ物を与えようとしてもその時必要な量しか受け取らない。ある時、印西という聖の所へやってきた時、印西が法文を聞かせよと願ったところ、朝顔の花から露が落ちるのを見て「見るやいかにあだにも咲けるあさがほの花にさきだつ今朝の白露」という歌を詠んで出て行って、その後はどこへか姿を消してしまったという。作者はこの話に続けて、その一・五倍以上を費やして、この乞食僧を賞賛している。

以上、『撰集抄』所収の説話のすがたを確認するために引用が長くなったが、このすがたは今見た冒頭の三話のみのことではなく、やや性格を異にする巻八の芸能説話を除いて、全編について見られるものである。しかも、その内容もすべてが似通った内容である。つまり、同じような話が全一一一話に亘って延々と繰り返されるのである。しかし、前述したように、『撰集抄』はひとつの話について作者の思いを語る部分が非常に長いところに特徴があるが、基本的には、ひとつの実話を語りそれによって仏教教理を説くというかたちであり、先にふれた『日本靈異記』や『今昔物語集』と変わりはない。しかも、その説くところは、やはり『日本靈異記』や『今昔物語集』と同様、その語る対象に対して教え諭すという内容であり、いわゆる唱導的なものである。その意味において、その説

話のかたちは、『撰集抄』も『日本靈異記』以来の仏教説話集の系譜上に位置するものであると言えよう。

二

さて、このように他の仏教説話集とは異なり、作者の思いを熱く、また多く語る『撰集抄』であるが、今、私が問題にしたいのはその作者の思いを語る部分の内容である。前述したように『撰集抄』は巻八を除いてほとんどすべての話が同じような内容であり、多くを費やして語る作者の思いも大同小異である。よって、以下、今引用した冒頭話及び第二話を対象に少しく検討を加えることにするが、繰り返し煩雑を避けるために検討の対象を二話に限定するのであって、その結果は『撰集抄』の説話全体に及ぶものであることを、前以て断っておく。

まず第一に気づくことは、作者は実話部分の主人公に対する賞賛に終始していることである。作者自身も含めて我々といかに異なって貴くすばらしい僧であったかということ、作者はただただ賞賛する。

・たれ々も、是をもてはなれんとし侍れど、世々をへて思ひなれにし事の、あらためがたさに侍り。しかるに、此増賀上人の、名利の思ひをやがてふりすて給ひけん、ありがたきには侍らずや。(巻一第一話)

・此事をきくに、そゞろに涙所せくまで侍り。……(中略)……此聖の、神のみことのりをげにと深く思ひ入侍りて、かなしう覚えし女、いとほしかりし子をふり捨てて、世捨人のたぐひとなり給ひけん、すべてありがたきには侍らずや。……(中略)……又、押しとりけん人の発心は、なほたけありて貴く侍り。さやうの

敵なんどの出家遁世せんには、いとどうれしく、ますく財寶にこそかゝるべきに、あさましと思ひて、ひとつ庵にゆきて、後世のつとをたくはへ給ひけん事、筆にもべがたく侍り。(巻一第二話)

このように、貴いことはこれ以上はないと言わんばかりの賞賛の仕方である。しかし、その賞賛は我々には到底実行できないという認識の上に立つものであって、逆の言い方をすれば、同様にすることは到底できないが少しでも近づくことができるように努めるべきであるという姿勢である。それは程度の差こそあれ、そのような貴い僧と同様なことが我々にもでき得るということであり、それは自力修行の立場に立つものである。親鸞聖人のみずからの凡夫性を認識し阿弥陀仏にすべてを委ねる絶対他力の立場とは全く異なるものであると言わざるをえない。

そしてこの賞賛は特にその心のあり方についてなされている。例えば冒頭話では名利を厭うべき託宣を受けた結果、徹底してそれに突き進む行動を賞賛しており、それは名利を捨てようとしたら徹底してそうする心の純粹さである。また、第二話では、賞賛の対象は、仮の宿りである世俗のことに苦しむことの無意味さを知らされた男が、ただちに妻子を捨てて発心出家した心であり、また土地を横領した男も、被害者の男の出家を知ってただちに発心した心である。その他の説話をみても、発心した心や、出家後の修行においていかに清澄な心を保ち続けたかを賞賛するものばかりである。私はかつて『撰集抄』が求道心の純粹さを求めるものであることを明らかにしたが、その心のあり方も、いかに純粹な心で発心出家したか、いかに清澄な心で修行に打ち込んだかということを問うものであって、親鸞聖人の言われるところの仏から与えられた信心とは異なり、あくまでも人間の心のあり方にとどまっているのである。

さらに、重要なことはその唱導のあり方である。『撰集抄』は作者の思いを語る部分が非常に多い点に他の仏教説話集とは異なる特徴を持っているが、前述のようにそこには衆庶に語りかける唱導のすがたをみることができる。しかし、それはどこまでも唱導の対象、つまり衆庶に対して仏教教理を啓蒙的もしくは教訓的に説くものである。そこには、みずから深く省みるすがたはない。たしかに、みずからも含めて我々の至らなさを反省するすがたは見られるが、それはどこまでも我々人間としての努力の不足であるとか認識の浅さを嘆くものであって、人間レベルでのものである。しかし、親鸞聖人は絶対者である仏に対峙した人間認識に立つものである。それは人間レベルにとどまるものではない。

すなわち、『撰集抄』の唱導は、自己を省みる姿勢を見せつつもどこまでも唱導の対象である衆庶に高みから啓蒙・教訓的に説くものであり、しかも自己を含めて人間そのものを省みるのもあくまでも人間レベルにとどまるものであると言わざるを得ない。絶対者である仏の前にみずから深く洞察し、みずからを煩惱熾盛の凡夫として絶対的自己否定へと至る親鸞聖人の人間観とは全く異なるものなのである。

三

視点を変えて、『撰集抄』に見られる念仏についてみてみよう。『撰集抄』中には「念佛」という語は三十六例使われている。⁴⁾

・白川の辺にて、竹など拾ひあつめて、かたのごとく庵しめぐらして、明暮念佛を申侍りければ……（中略）……妻子きゝえて、かの所にきたり侍りて、とかくこしらへ侍りけれども、あへて返事もし給はず、いよく念佛をぞし給へりける（巻一第一話）

・たゞ、いつとなくうちしめり、とき々念佛しなんどしても、涙を目に浮めてのみ侍り。……（中略）……狩すなどりし、あみ引なむどするを見ては、けしからず泣きもだえて、「あひ構へて念佛し給へ」となん云て……（中略）……悪つくるものをあはれと涙をながし、念佛すゝめさせ給へりけん（巻二第二話）

このようにかなりの頻度で「念佛」の語は用いられており、中には

・たゞ二心なく念佛を申侍りければ（巻一第二話）

という用例のように一心称名を語るものもあり、親鸞聖人の説かれる念仏と同様なものかという点、決してそうではない。その念仏はどこまでも行としての念仏である。

・時々念佛申し、要文など誦して（巻一第三話）

これは称名が他の行と共に行じられていることがわかる。また、

・睦まじき友となり侍りて、同声に念佛し給へりければ、功つみ貴くすみわたりて（巻一第二話）

・年はいたくたけぬれど、心はむかしにかはらで、思ひ入念佛の功もなくして（巻一第六話）

の用例からも念仏は功德を積むためのものであることがわかり、したがって、

・頭燃をはらふ思をなして、念佛三百返申ぬ（巻七第九話）

・一返の念佛をも後世のためと思ひむけ侍らば、などてか阿弥陀佛みすごさせおはしますべき（巻七第十五話）
の用例のように、当然その回数が重要になる。また、

・香煙ほそくそびき、空に紫雲のたねをまき、念佛の声しづかにして、西に聖衆の来迎を待ちおはしけるが
（巻四第四話）

の用例では、臨終行儀としての念佛であり、それは来迎を得るためのものである。さらに、

・おほくの物を害したりける罪をおそれ、常は心をすまして念佛をぞ申侍りける（巻五第二話）

というように、滅罪のための念佛であり、当然ながらいかに心を澄まして称えるかが問われるものである。さらに

・「かの魚のために念佛して、後世とはむ」といへば……（中略）……さて、魚のためにひそかに念佛して、

後世をとぶらひ侍りき（巻六第四話）

というように、死したものの追善供養のために称え、後世を弔うための念仏である。

すなわち、『撰集抄』における念仏は、どこまでも往生を得るための功德を積む行の一つとしての念仏、すなわち自力の念佛であり、そのためには回数や称える時の心のありようが重要なのである。絶対他力に立つ親鸞聖人の説かれる報恩謝徳の念佛とは大きく異なったものである。

結

以上、『撰集抄』の説話について、その唱導性について検討を加えてきたが、それは親鸞聖人の了解されたものとは大きく異なるものであった。この違いは『撰集抄』がいわゆる旧仏教である聖道門・自力修行の教えに立つものであることによるものである。真言・天台に代表される旧来の仏教の教えに拠っては煩惱熾盛の凡夫が救われることはないと言われた親鸞聖人の信仰と全く異なることは、当然であると言えよう。よって殊更に言うまでもないことであるかもしれない。しかし、本稿で私がそれを承知の上であえてその違いに言及したのは、教化ということを確認したためであった。

如上、私は「教化」という語を一切使わず、もっぱら「唱導」という語を用いてきた。辞書によれば、「唱導」とは「法を説いて仏教に引き入れること」であり、「教化」とは「教導して衆生を仏道に向かわせること」であり、その意味に違いはない。事実、「教化」という語は『紫式部日記』をはじめ多くの文学作品の中でも用いられており、仏教説話集をはじめ主に仏教関係の書に多く用いられている「唱導」の語より一般的であった。『撰集抄』の中でも「唱導」の語は用いられていないが「教化」の語は

・「京さまへ出給ひて、人をも教化し給へかし」と、おのくすゝめ給へども（巻七第二話）

・しかあるのみならず、つねは教化して念佛を申させけるとかや（巻七第三話）

・六年をへて、思ひのごとくに僧都の教化にあづかりて、本意のまゝに往生し給ひてけり(巻九第三話)と三例用いられている。

また「説経」とは「経義・教義を説き、衆庶を化導すること」とあって「説法」・「唱導」と同じであるとする。さらには「説教」は「宗教の教義・趣旨を説き聞かせること。教理を説いて人を導くこと」とある(すべて『広辞苑』による)。つまり、「唱導」・「教化」・「説経」・「説教」の語の間に大きな意味の違いはないのである。

しかし、いわゆる旧仏教の立場に立って用いる場合と親鸞聖人のそれをさして言う場合に、共に「教化」の語を用いて言うことに私は躊躇せざるを得ないのである。本稿において『撰集抄』を対象にしたのは、『撰集抄』が旧来の仏教の立場に立つ仏教説話集を代表する一つであること、それぞれの説話には作者の思いを語る部分が他の仏教説話集と違って非常に多くを割いていること、さらには仏教説話集全体に言えることであるが、仏教説話は唱導のすがたを色濃く残していることによる。そして『撰集抄』の説話にみられる唱導のすがたを考察することによって、それが親鸞聖人の教化といかに異なるものであるかを見、ひいてはいわゆる旧仏教における教化が聖人のそれとは大きく異なることを指摘することを、本稿は目的としたのである。

『撰集抄』にみられる教化は、衆庶に対して高みから啓蒙的・教訓的に説き聞かせるものであり、みずからの深い自省の上に立つものではなかった。自己の至らなさは省みられているが、それはあくまでも人間レベルのものであって努力次第では解決し得るものであった。またほとんどの話が貴い行為をなした僧への賞賛に終始しているが、その賞賛の行為はその心に対してのものであった。いかに心を澄ましていたか、いかに清らかな心であったかとい

うことに對して賞賛するのであり、どこまでも自力修行の立場に立つものであった。これは『撰集抄』のみに言い得ることではなく、仏教説話集全般について共通して言い得ることである。

しかし、親鸞聖人の説かれるところのものがそうではなかったことは、『歎異抄』その他をみるまでもなく明らかである。すなわち、親鸞聖人はどこまでも自己の凡夫性の自覚に立っての自己の了解を説かれるものであり、自己の絶対的否定によって導き出されるものである。聖人は決して人に対して説こうとはされない。どこまでも聖人ご自身の了解を語られるばかりである。それが聖人における教化となっているのである。どこまでもどこまでも聖人ごからの凡夫性の強い自覚からほとぼしる弥陀への帰依そのものである。

このように大きく異なる教化のすがたを共に「教化」と表現することはできない。両者の「教化」は似て非なるものと言わざるを得ないのである。

以上、深い教義上のことはさておき、親鸞聖人以前の教化がいかなるものであったかについて、少しく明らかにしたつもりである。

註

- (1) 『日本靈異記』及び『今昔物語集』は、新日本古典大系(岩波書店)による。
- (2) 『撰集抄』は、西尾光一氏校注『撰集抄』(岩波文庫)による。
- (3) 拙稿『撰集抄』における清僧意識(『同朋国文』第九号所収)昭和五年三月・同朋大学国文学会)、『撰集抄』の信仰態度について一発心を中心に(『文藝論叢』第四号)一九七五年三月・大谷大学文藝研究会)参照。
- (4) 安田孝子氏他共編『撰集抄自立語索引』(笠間索引叢書一二三)を利用していただいた。